

「体験レポート」 中学生山岳部 北摂山群を歩く 近藤浩平 帝塚山通信台 学生 誌

まず最初にぼくたちの志登高会の説明をした。

会の最大の特徴は、中学生のみで運営されていることである。しかも指導はまったく受けず、わずかな経験と知識によって山行が成り立っている。そのため、経済的、時間的、技術的にも制限され、当然、学校からの制限もある。だから、六甲から比良、北ア、南アとやつたあたりまでの進み方ではできない。ぼくたちは、低山にバリエーションルートを求める完全放任の山岳部のようなものだ。

中学生が指導も受けずに活動していると、大人からの批判が大きい。ぼくたちから見ると大人の中にこそ批判されるべき人が多し。山でぼくたちに頼ってくる人もいる。また志登高会本部としては、氷雪、岩の山が高級であるという考えには納得しない。ぼくたちはありきたりの進み方をしていないことにむしろ誇りを感じている。だから、高山、名山ばかり登る方や、岳連などのえらい方も、決して無謀な中学生だと言わないでほしい。

前置きが長くなったけれど、以下は北摂の山を登った時の体験記である。

北摂—三つのヤブ山を越えて
北摂山群北部、この山域は近畿の人以外はほとんど知らないだろう。大阪の北の山—摂津北部—北

撰で、広義には丹波の南西部の、ごく一部も含む広い低い山地だ。最高の深山でも七九〇・五で、京都北山より低い。しかし入山者が少ないので多くの場合、踏跡もわずか、他の登山者や、道標に頼れることはまれである。横尾山七八四・九、弥十郎方岳七一一・一、ひるが岳五九二・七と地味な低山を、わが志登高会が登った。もちろん大人の引率はない。ナタを持つての山行だ。

一九七八年六月十八日、晴のち一時雨。朝、森上をたつ。暗い杉木立の浮峠を越え行者口へ。剣尾山と横尾山が並び、その間の尾根は緩やかな曲線を描いている。参加者は、小林、松尾、能口、ぼくの四人。剣尾山へとハイキングコースを登る。真夏の直射して暑い、背後に能勢妙見山や箕面を見て、やっと剣尾山頂。東から北にかけては京都北山、丹波高地が続き、北西に深山、西には横尾山とトシビカラの尾根、南には北摂南部、帝釈山塊(丹生山系)、六甲が



志登高会の仲間たちと

実際に大きい。ひるが岳も確認できる。

休息のあと横尾山へ向かう。少し行った笹原のところで、横尾山から来た人たちと出会った。どこかの山岳部か山岳会だろう。かなりの人数で重装備だ。彼たちを見てシラケた顔をしている。こんなヤブ山で中学生に会うとは思わなかったのだから。

さらに進むと笹が高くなり、目印をつけながら進む。とうとう笹が身長ほどになる。松尾など笹の下になっている。平泳ぎや潜泳で横尾山頂の樹林に入り、笹原を横断して橋のある山頂に着く。山頂は北と南が開け、人の気配はない。トシビカラの岩峰を通って下ろすと、笹がひびく。横尾山頂をそのまま行こうだったが、時間ももなく、雨も降り出したので、剣尾山へ逃げる。

剣尾、横尾間は片道一時間強、登頂だけはした。その後、冬にも行ったが、湿雪と時間切れのため失敗した。

第二の山、ひるが岳。一九七八年十二月二十六日。松尾、中西、柴森、ぼくの四人が参加。雪はない。川西能勢口からバスで杉生の南、清水へ。ぼくたちが降りるとバスは空っぽ。前谷の車道に入る。地図に牧場とあるところは、荒地。四〇〇/五〇〇程度の山に囲まれたひるが岳は、単純な形で低い。谷ルートに入り、小滝をいくつか越し、鞍部へと登る。山全体が葉っぱに覆われているので滑る。山頂の北の鞍部から左へ登り山頂に着く。平坦な松林で三角点も何もない。柴森が木に登って喜んでいる。大野山も見えて、すごい展望らしい。岩の上で昼食。ホカホカと暖い。

下りはひどく急なヤブで、杖をホキホキ折りながら隘道のような切り開きを下る。イバラに突入し牧場跡へ着く。イバラにやられて軍手に血が付いていた。

そして最後は、弥十郎方岳。一九七九年一月五日。曇り、残雪あり。参加は柴森、松尾、中西、ぼく。城東日置から歩き、四十九

り林道に入る。やがて如市へ分岐する鞍部に着く。道は尾根を巻ぎ、谷を渡って小尾根に取り付く。この谷間は残雪が多く、早春のようだ。小尾根を登りきると橋のある弥十郎方岳山頂に着く。林の中からは、北に篠山盆地をはさんで、多紀連山の岩稜が、西には白髪岳も見える。東には奥谷峠南西の七二五・九、九、南には籠坊への稜線が続く。予定よりかなり早い。南へ行くので伐採地があり、リスらしきものを見かけた。

弥十郎方岳山頂を北に見る所で昼食。しばらくしてから伐採地まで来た。下り気味に尾根を行く。類似地形が多く迷いやすい。赤松のピークを越え籠坊への鞍部に着く。西の谷の方が行きやすそうなのでそちらへ下る。林道に降りつき、やがて後川上バス停に着く。意外と楽だった。しかし低いわりには変化もあり、説問も地形が小さく複雑で、名のある高山よりもはるかに難しいと思った。

低いヤブ山は、氷雪や岩の山と違った楽しさがあり、自分には一番ふさわしい登山だと思った。同行した柴森も次のように語っていた。「自分のヤマカン的なルート探しができるし、また迷うという怖さもあるけれど、それを乗り越えて山麓に着いた時の、やったという感じが、ヤブ山ではすごく強い。ぼくはさまよい歩くという独特な感じが好きだ」と。

●キミが最近、山で経験したこと、変わった山行、沢歩き、沢下りなど、体当たり体験を「体験レポート」宛送ってほしい。四〇〇字以内。要旨分には要定額料と郵賃を要す。

ガ岳の往復の予定です。岩登りも

パーにならぬよう涙ぐましく努力